【ドイツのメディアから – 2 】

**過去から学ぶということ**

6月12日、今年もドイツ全国多数の小・中学校、高校に「アンネ・フランクの日」がやって来た。この日はあの“アンネの日記”の著者であり、1945年にナチスの強制収容所で15歳で亡くなったアンネ・フランクの生誕日なのである。ドイツでは2017年以来毎年、公益法人アンネ・フランク・センターが複数のユダヤ人基金や研究機関の支援のもと、それに連邦法務省などの協賛も得て全国の学校に呼びかけ、センターが定めるテーマのもとで子供たちが準備したプロジェクトをこの日に発表するよう促している。今年のテーマは「自由」であったが、参加した学校は全国で340校に及んだ。主催側の意図は、毎年この日にアンネ・フランクの運命とホロコーストの記憶を新たにすることで、子供たちに民主主義への積極的な関心を呼び覚ますことにある。各学校のイベントの模様は毎年この日の全国ニュースをはじめ様々なメディアで取り上げられるが、今年も小学生たちが誇らしげに嬉々として自分たちが準備した展示を紹介する様子が映し出された。子供たちの顔にはもちろん、ドイツの暗い過去や罪の意識を思わせる影は全くない。彼らが口々に述べるホロコーストや民主主義についての意見は、おそらく日本の学校で同じことを聞いたなら日本の小学生たちが口にする思いとほぼ同じであろう。

この催しに限らず、ドイツでは今日に至るまで倦むことなく繰り返し繰り返しナチスドイツの過去をめぐるインタビュー番組、ドキュメンタリー、ルポルタージュ、ドラマが作られては、テレビのゴールデンタイムに放映されている。30年以上前、私がドイツに住み始めた当初は、ヒットラーとその周辺の人物、つまり「実行犯」側の事実を探る番組が多かったように覚えているが、その後は当時体制側にいた無数の「陰の支援者たち」、反ナチスの「抵抗者たち」、ユダヤ人を中心とした「犠牲者たち」を追う番組に広がって行き、ここ数年は当時このドイツで生活していた「普通の人たち」にスポットライトが当たるようになってきた。「普通の人たち」とは、ナチスとも軍隊とも関係なくこの時代に日常を送っていた「市井の人たち」であり、番組制作側は「これは、今この番組を見ている貴方のご両親、御祖父・御祖母さんの話かもしれませんよ」と示唆している。日本では、戦中の市井の人々が番組テーマに取り上げられる時「時代の犠牲者」として描かれるのが常であるが、ドイツで追究されるのは、彼らが犯した罪だ。見て見ぬふりをした罪、怖ろしいことが起こっているのに気づきながら何も行動しなかった罪、である。私の姑は当時も今もドイツの片田舎に住んでいるが、終戦時は5歳の小さな子供であり、状況を具体的に把握はしていなかったものの、周りの村のユダヤ人の店がある日突然閉鎖され、ユダヤ人たちが一斉に姿を消したことはぼんやりと覚えている、と話してくれたことがある。田舎に住む5歳の子供が気づいていて、大人たちが気づかないわけはない。だが、これらの番組の意図は決して、当時時代の波に巻き込まれ、流されるしかなかった普通の人々を糾弾することにあるのではない。ただ、人間というのはそういう存在であり、普通の人間が、つまり誰もが、悪意なくしてもこういう経路を辿ってしまう危険に常に晒されているのだ、というメッセージを送ろうとしているのである。

戦後何十年も経ち、国民の大部分がすでに戦後世代と入れ替わっているのに、自分の国にいながら繰り返し繰り返しナチスの過去を目の前に突きつけられているドイツ人、特に当時生まれてさえいなかった世代のドイツ人にとっては、いまだに背負わされるこの国の負の歴史がどれだけの負担になっているのだろう、と思うことがある。現に、ここ数年台頭著しい極右政党AfD（ドイツのための選択肢党）は、このナチスドイツの過去を否定することに躍起になっている。目下ドイツ民主主義にとっての脅威となりつつあるこの極右政党は、徹底的なナショナリズムを掲げ、その政治家たちの演説に当時ナチスが用いた語彙が好んで取り入れられることでもしょっちゅう物議を醸しているが、数年前には、ベルリンにあるホロコースト警告記念碑を「国の恥」と呼び、その撤廃を求めたことでも、良識ある国民を激昂させた。自分たちが犯した犯罪をいつまでも忘れまいとする努力は、一つ間違えると危険な方向に大きく振れてしまう可能性もある、ということだ。それにしても、過去の罪をいつまでも背負わされることで、ドイツ人であることのアイデンティティや愛国心は揺らぐのだろうか。2014年にブラジルで開催されたサッカー・ワールドカップでドイツが久々に4度目の優勝を遂げた時、その翌日の新聞に寄せられたアメリカ人記者のコメントが、私には大変興味深かった。この記者は、「ドイツ人というのは、普段ドイツ人であることを恥じているかのようなところがあり、自分の国籍を堂々と誇示したり、ドイツ人同士集まって国歌を歌ったりしてはしゃぐようなところがない。だが、昨日（サッカーで優勝した時）私は初めて、大勢のドイツ人が大喜びで国旗を掲げ、自国への誇りではちきれんばかりになっているところを見た」というようなことを報告していた。その通り普段のドイツ人は、国籍を誇示するようなところがないのである。

「過去の前で目を閉じる者は、現在に対しても盲目になる」とは、1985年の終戦記念日に当時連邦大統領であった故リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー氏が行った、世界的に有名な演説の一文である。この一文はドイツでは今でも頻繁に引用され、ナチスドイツの過去に対するドイツの姿勢を決定している。この演説の中でもはっきり言われているように、過去の負の歴史を直視し受け入れる、とは、その後の世代が罪を背負い贖罪することなのではない。その時々の世代が現在と未来の平和と民主主義を守ろうと努力するのに、これは不可欠なことなのだ。そしてナチスの過去はドイツ国民のみならず世界への警告ともなるべきで、ドイツは自国の罪の歴史を全世界に伝え続けようと努めているとも言える。2015年の9月、シリアを中心に中近東、アフリカやバルカン諸国からも数十万人の難民がドイツの国境に殺到した時、国境を開き受け入れる決断をしたメルケル首相中心の国の動きと並行して、大学生を中心としたドイツの若者たちは即座に、難民列車が到着する大都市の主要駅での受け入れ態勢と物資支援の準備に走った。当時フェイスブック経由で、毎日難民列車の到着場所と時刻、到着する難民のおよその人数、必要な物資と人材の情報がかけめぐり、それに応じて本当に大勢の市民が動いたことは、私の記憶にはっきり刻まれている。このドイツの「ウェルカム・カルチャー」は、無計画に大勢の難民を入れ過ぎて役所がパンクし大混乱を招いたとして、後にさんざん揶揄されることにもなるが、あの時の連邦政府の決断と、難民という人間の尊厳を守るために動いたドイツ市民の行動は、唯一正しいものであったと私は思う。あれは、過去から学んだドイツ人の姿だったのである。このようにドイツは私にとって、過去があって今がある、という当たり前のことをたびたび思い出させてくれる国となっている。

（2020年6月14日）